



大手前大学
大手前短期大学リポジトリ

芦屋市谷崎潤一郎記念館についての一考察

著者	塩田 昌弘
雑誌名	大手前大学論集
巻	9
ページ	157-185
発行年	2008
URL	http://id.nii.ac.jp/1160/00000532/



芦屋市谷崎潤一郎記念館についての一考察

塩 田 昌 弘

要 旨

芦屋市谷崎潤一郎記念館は、明治・大正・昭和の時代を通して文豪の名に相応しい文筆活動をした小説家、谷崎潤一郎（明治19年～昭和40年）の原稿、書簡、書籍、美術工芸品、愛用の日用品などを展示して、世界の谷崎文学の普及を試みたもので、昭和63年、芦屋市に開館された。

明治44年、小説『刺青』、『麒麟』を発表した谷崎は、永井荷風に絶賛され、文壇の第一線に登場した。大正12年、関東大震災の後、関西に移り住み、確実にその文学の才能を開花させていった。昭和8年、代表作の『春琴抄』、『陰翳礼讃』を発表している。昭和9年、兵庫県武庫郡精道村打出下宮塚16（現在の芦屋市宮塚町12富田碎花旧居）に住み、創作に精進している。昭和10年には、谷崎潤一郎のインスピレーションの源泉となった女性・根津松子と結婚した。昭和18年、58才の時、芦屋の風土と日本の文化の古典美に想をえた名作『細雪』を発表するにいたる。昭和24年、『細雪』により朝日文化賞を受け、同年、文化勲章を受章した。昭和40年、80才で死去。

記念館は、谷崎好みの数寄屋風に設計、庭園は京都市左京区下鴨の旧居、潺湲亭（せいかんてい）の庭を模して作られている。関西、谷崎が好んだ芦屋という風土、そこから生まれた文学作品、文豪の創作を助けたたたずまい、これらの要素をこの記念館は総合的に理解できる様に設計されている。風土と文学と建築美について論考しようと考えている。

キーワード：芦屋市谷崎潤一郎記念館、細雪、倚松庵

〔目次〕

序章

I. 芦屋市谷崎潤一郎記念館の生成

II. 谷崎潤一郎の生涯

終章

注と参考文献

図版

序章

芦屋市谷崎潤一郎記念館は、明治・大正・昭和の時代を通して、文豪の名に相応しい作家活動を成しえた小説家・谷崎潤一郎（明治19年7月24日～昭和40年7月30日）の遺徳を偲び、谷崎の代表作『細雪』の舞台が芦屋であることから、芦屋市内に建設され、昭和63年10月8日開館された。

芦屋、それは谷崎が好んだ風土であり、かの地の倚松庵に住み、絢爛たる上流家庭の話 작품을作品化した。本論では、谷崎の創作の源となった風土や建てもの、即ち、作家をとりまく環境との関係を考察しようと思う。

I. 芦屋市谷崎潤一郎記念館の生成

谷崎潤一郎と芦屋とのかかわりは、谷崎が昭和9年3月14日から昭和11年11月20日まで、兵庫県武庫郡精道村打出下宮塚16（現在の、芦屋市宮塚町12富田碎花旧居）に居住していた事。また、昭和10年1月28日に芦屋で松子夫人との結婚式を挙げた事。以上二件を挙げる事ができる。¹⁾また、小説『細雪』が芦屋を舞台としている事も挙げる事ができよう。

芦屋は谷崎と私が初めて家らしい住居を持ったところ。大きな障害と戦っている私達を理解してくれる友人も芦屋の人だった。芦屋には私たち夫婦の思い出が至るところにある。芦屋に記念館が出来たら谷崎愛蔵の遺品をそっくり納めたい。¹⁾

この松子夫人の意向に応じて、芦屋市は谷崎潤一郎記念館を設立したのであった。²⁾
施設概要については、『芦屋市谷崎潤一郎記念館概要』に次の様に記されている。³⁾

芦屋市谷崎潤一郎記念館についての一考察

1 設置主体、運営主体及び区分

設置主体 芦屋市、運営主体 財団法人芦屋市文化振興財団、区分 博物館類似施設

2 記念館建設の考え方

施設建設にあたっては、遺族及び関係者の意見をまとめ、谷崎潤一郎が好んだと思われる雰囲気をつくりだせるように配慮し、庭園を関西最後の住まいであった京都市左京区下鴨の旧潺湲亭の庭を模すとともに建物を和風建築とした。また、図書館、美術館とあわせて文化ゾーンの施設としての位置づけを行った。

3 設計の要点

(1) 平面計画上のポイント

(略)この『潺湲亭』の建物・庭園の感じをできるだけ取り入れ、その庭園が良く見える位置に和室展示スペースを配置した。また来館者にゆとりを感じさせるようロビーを広く取り入れ、テラスより園路を通して庭園を間近に観れるように配慮している。

(2) 構造および設備計画上のポイント

軒の出を深くし、越屋根を設け、階高を異にした展示部分とロビーおよび管理部分とを逆L字形に配し、勾配屋根にし寄棟でつないでいる。

設備計画として、展示室・収蔵庫は外壁と内壁を二重壁構造にし、収蔵庫は温湿度をコントロールしている。

(3) 意匠・その他

「潺湲亭」の感じ、数寄屋風を基調とした。屋根は淡路産瓦とし、外壁はじゅらく壁風のボーダータイルを横方向突付貼りとしている。

展示室等の天井は杉中拵敷目板貼勾配天井とし、内部造作材にも木を多用し、柔らかい感じ、和風の感じを取り入れている。

(富家建築事務所：元所員・平松晴夫)

[出典：「建築設計資料28 記念展示館—文学館から企業博物館まで」建築思潮研究所・編、建築資料研究社発行より抜粋]⁴⁾

4 記念館の規模

- (1) 構造 鉄筋コンクリート造り2階建て寄せ棟造り
- (2) 敷地面積 1697.98㎡ (514坪)

- (3) 建築面積 639.49㎡
- (4) 主要施設面積
- 床面積 1階 481.53㎡
 - 2階 109.93㎡
 - 延べ床面積 591.46㎡
- 主要室の床面積（概数）
- 1階 事務室 24㎡
 - 研究・資料室 24㎡
 - 講義室 35㎡
 - 展示室 138㎡（展示ケースを除いた実床面積81㎡）
 - 機械室 19㎡
 - 館長室兼応接室 21㎡
 - 映像展示室 16㎡
 - ロビー 124㎡
 - 2階 収蔵庫 57㎡
 - 整理室 19㎡
 - 機械室 22㎡
- (5) その他の部分の面積
- 庭園部 約300㎡（内池90.5㎡、待ち屋3.3㎡）
- (6) 設計及び施工
- 設計：富家建築事務所⁵⁾
 - 施工：竹中工務店
- (7) 主な設備
- ① 空調方式 中央方式、熱源：ガス吸収式冷温水発生機2機
 - ② 防火 消火：ハロンガス消火（収蔵庫）、排煙：自然排煙
 - ③ 防犯 警備保障
- (参考) 文化ゾーン敷地（概数） 合計 14600㎡
- 図書館 6480㎡、谷崎記念館 1700㎡、美術博物館 6420㎡

また、収蔵資料については、下記のようなものである。

資料は、開館にあたって谷崎松子夫人をはじめ遺族から贈られた約500点を中心に、その後谷崎潤一郎の秘書であった小瀧穆氏や関係者からの寄贈資料、購入等により徐々に収集している。資料には、書籍、雑誌、原稿、書簡、美術品、写真、日用品、その他がある。

分類	合計(点)
書籍・雑誌等	8156
原稿・書簡等	974
絵画・書・彫刻等	160
写真類	1641
文房具・日用品・その他	722
計	11653

(注) 平成20年3月31日現在

さて、芦屋市谷崎潤一郎記念館は、谷崎が好んだ京都市下鴨の潺湲亭の数寄屋風の建築美や庭園のデザインを尊重して設計されたと言われるが、それはどのようなものであったのか、谷崎の作品『夢の浮橋』と、『高血圧症の思い出』の中の「潺湲亭」の描写表現から建築の佇まいを偲んでみよう。

〈潺湲亭について〉

もともとこの邸は二条の或る度量衡商の別業であつたのを、すゝめる人があつて譲り受けたもので、建坪はさほどでもないけれども、庭が廣くて林泉の美があり、門の前は鬱蒼とした糺の森に面してゐた。私はこの邸を「潺湲亭」と名づけ、当時日本に滞在してゐた錢瘦鉄氏に揮毫して貰つた扁額を掲げてこの庭を限りなく愛し、毎年春と秋とには缺かさずこゝに戻つて過す習慣になつてゐた。滝があり池があるので、冬は寒く、湿気が多いところから、冬を越すことはめつたになかつたが、この庭の雪景色の素晴らしさも知らないではなかつた。⁶⁾

〈正門・表玄関〉

庵は太い二本の杉丸太の正門を這入ると、石礎の路次の奥にもう一つ中門があつた。路次の両側にはさゝやかな竹が植わつてゐ、朝鮮から運んで来たらしい李朝の官人の石像が二つ相對してゐた。中門は杉皮を檜肌葺のように葺いた屋根があつて、こゝの門は常にとざされてゐた。門の左右に竹の聯が懸つてゐて、

林深禽鳥楽 (林深_シ禽鳥_シ楽_シ)

塵遠竹松清 (塵遠_シ竹松_シ清_シ)

とあつたが、誰の詩で誰の書であるかは父も知らないと言つてゐた。⁷⁾

〈母屋・庭〉

千坪の庭は林泉と云ふには少し狭過ぎるやうだけれども、「植惣」と云ふ造園の技術のすぐれた庭師が丹精を凝らしたもので、実際よりは餘程奥深く幽邃な感じを與へた。表玄関

の、三疊の襖を開けると八疊の間があり、その奥に十二疊の座敷があつて、そこが一番の廣であつた。そこはやゝ御殿風に造られてゐて、東から南へ縁が廻らしてあり、欄干は勾欄風になつてゐた。南側はわざと日の光りを避け、棚を池の面の方へさしかけてあつて、野木瓜の葉が一ぱいに繁つてゐ、池の水がその葉の下を潜りつゝ、勾欄の際まで寄せてゐた。欄にもたれて眺めると、池の向うの木深いところから瀧が落ち、春は八重山吹、秋は秋海棠の下を通つて、暫くの間せゝらぎとなつて池に落ちる。流れが池に落ちる途中に、青竹で造つた添水と云ふものが仕掛けてあつて、水が一遍竹筒の中に溜り、パタンと云ふ音を立てゝから下に落ちる。⁸⁾

〈合歡亭〉

祖父が自慢にしてゐたと云う合歡の花が咲いてゐたから、六月中の或る日のことであつたらう。私がふと、合歡亭で書見をするつもりで、アンナ・カレニナの英譯本を携へて、その合歡の花の咲いてゐる庭の方から上つて行くと、思ひがけなくも母が一人で八疊の間の縁先に近く、茶色の皮の座布團を敷いて乳を搾つてゐた。母はこの頃茶席で乳を搾つてゐたので、合歡亭でこんな恰好をしてゐようとは、思ひもよらないことであつた。⁹⁾

以上の潺湲亭と『夢の浮橋』との照合部分の論述については、たつみ都志著『谷崎潤一郎・「関西」の衝撃』（和泉書院、「潺湲亭詳細図及び『夢の浮橋』との照合」、p. 264～p. 276、1992. 11. 25¹⁰⁾）を参考とし、また、谷崎の『夢の浮橋』、『高血圧症の思い出』の該当部分の文章（原文）を引用した。

Ⅱ. 谷崎潤一郎の生涯¹¹⁾

●谷崎潤一郎は、明治19（1886）年7月24日、東京市日本橋区（現・東京都中央区日本橋芳町一丁目四番）蛸殻町二丁目十四番地に、父谷崎倉五郎、母関（せき）の次男として生まれ、潤一郎と命名された。

●倉五郎は、神田松住町の玉川屋（酒問屋江沢家）の三男で、谷崎久右衛門の三女関の婿となった。関は錦絵の素材にされた美貌の持主で、家事には携わらなかった。（1歳）

●明治25（1892）年9月、日本橋区坂本町28番地の市立日本橋区阪本尋常高等小学校に二学期から入学した。極めて内気なお坊ちゃん育ちで通学を嫌い、乳母の付添を必要としたが、入学以来欠席が多く、翌年進級の際に落第した。（7歳）

●明治26（1893）年4月、再び一年生となったが、担任の野川闇栄の好指導もあって成績が向上し、第一学年を首席で修了して修業式の一年総代となった。（8歳）

●明治30（1897）年4月、阪本尋常高等小学校尋常科四年を卒業。在学中三年までは笹沼源之助と交互に首席を占め、卒業成績は三番であった。4月、高等科一年に進学。稲葉清吉の担任で卒業まで変わらなかった。

稲葉先生は、儒教・仏教とくに陽明学と禅哲学に傾倒し、和文学・漢文学をよくし、いつも『三教指帰』『正法眼蔵』『王陽明全書』『山家集』『伝習録』などや古人の文章を手写したノートを携帯し、王陽明・柴田鳩翁・鈴木正三・西行・カーライルなどについて話し、『椿説弓張月』『経国美談』などを話し、『太平記』『雨山物語』などを用いて美文の暗誦を奨励した。潤一郎はこの稲葉先生に文学上、思想上の強い感化を受けた。（12歳）

●明治34（1901）年3月、阪本尋常高等小学校高等科全科（八年）を卒業。卒業成績は二番であった。4月、府立等一中学校（現・日比谷高校）に入学した。（16歳）

●明治35（1902）年9月、二年級の課程を飛び越し、一年の一学期から三年の二学期へ進んだ。成績は優秀。（17歳）

●明治36（1903）年6月、一家の生活が極度に窮迫し、そのため再三廃学を迫られたが、この頃から漢文担当の渡辺教官の周旋と、貴族員議員原保太郎の世話で築地精養軒（京橋区采女町…現・銀座東五丁目）の主人北村氏の家に住み込み家庭教師となり、通学を続けた。（18歳）

●明治38（1905）年3月、府立第一中学校第五学生を卒業。9月、第一高等学校英法科に入学。（20歳）

●明治40（1907）年6月、初恋の相手である北村家の小間使い福子の谷崎へ宛てた手紙が北村夫人に発見される事件があって表沙汰になり、北村家を出た。同時に福子も郷里の箱根へ帰された。この事件を契機に文学で身を立てる決意をかためた。（22歳）

●明治41（1908）年7月、第一高等学校英法科卒業。9月、東京帝国大学国文科に入学。当時文壇の主流を占めていた自然主義文学に反感を抱き、反旗をひるがえそうという野心に燃えていた。（23歳）

●明治42（1909）年、失意と焦慮に青年期特有の不安が重なって、強度の神経衰弱となり、常陸多賀郡の助川（現・日立市）にある偕楽園別荘に転地した。ここで荷風の『あめりか物語』を読み、感動し、「芸術上の血族」として荷風に親近と尊敬の念を抱いた。（24歳）

●明治43（1910）年11月、日本橋区大伝馬町瓢丹新道の西洋料理店三州屋で開かれた「パンの会」に出席、鉄幹・有明ら多くの文壇の先輩と初対面し、初めて永井荷風に会った。12月、有楽座に舞台稽古見物中の荷風を訪ね、『刺青』掲載号を渡し、一読をこうた。（25歳）

●明治44（1911）年1月、『信西』で初めて原稿料を貰った。この頃、父は蛸殻町の取引場へ通っていたが、一家は神田区（現・千代田区）南神保町の路地裏で窮迫の生活を送っていた。祖母ふさが73歳で死亡。大学を退いてから居所定まらず放浪生活を続けていたが、11月、滝田栲陰の依頼で、『秘密』を初めて「中央公論」に載せ、また、永井荷風の評論「谷崎潤一郎氏の作品」（「三田文学」第二卷第十一号）で激賞されたことにより、文壇に華々しく登場した。（26歳）

●大正6（1917）年3月23日、妻千代子を入籍。5月14日、母関が死亡。享年54歳。（32歳）

●大正8（1919）年2月14日、父が死亡。享年61歳。蛸殻町の家を親戚に渡し、本郷区（現・文京区）曙町に転居。近くの駒込神明町に住む佐藤春夫との交遊が始まった。12月、神奈川県小田原町（現・小田原市）字十字町に転居、小田原時代、同町在住の北原白秋としばらく交遊が続いた。（34歳）

●大正12（1923）年8月初旬、家族とともに箱根の小涌谷ホテルへ避暑に行ったが、9月1日から長女鮎子の学校が始まるので、29日に妻子を横浜に送っていき、また单身もどって31日夜から芦の湖畔へ泊りがけで遊びに行っていた帰途、関東大震災にあう。9月4日、小涌谷をたち、5日朝大阪に到る。（その間、妻子と連絡があったかどうかは分らぬ。）9日、神戸から上海丸で横浜に到り、11日、東京府杉並村の避難先で家族と再会した。20日、家族とふたたび上海丸で神戸に赴き、同月下旬、一家を挙げて京都に移り、上京区等持院に家を持った。11月、東山三条要法寺内に転居。12月、兵庫県六甲の苦楽園に転居した。（38歳）

●大正13（1924）年3月、兵庫県武庫郡本山村岡本好文園二号に家を買って転居した。

以後、関西に定住することになる。(39歳)

●昭和2(1927)年2月、「銚舌録」連載の途中、小説観の相違から芥川龍之介と「『話のある小説』をめぐり論争をした(「文芸的な、余りに文芸的な」、題下に「併せて谷崎潤一郎氏に答ふ」)。3月、佐藤春夫が「潤一郎人及び芸術」を「改造」に発表。7月、自殺した芥川龍之介の死を弔う言葉を「改造」に発表し、その全集の編集委員にも関わった。(42歳)

●昭和5(1930)年8月18日、兵庫県武庫郡本山村岡本の自宅で潤一郎一人の合同記者会見があり、妻千代子とは離別の上、千代子を佐藤春夫と結婚させる旨の挨拶状を知友に送った。

拜啓炎暑之候尊堂益々御清栄奉慶賀候陳者我等三人此度合議を以て千代は潤一郎と離別致し春夫と結婚致す事と相成り潤一郎鮎子は母と同居致す曰く素より双方交際の際は従前の通りにつき右御諒承の上一層の御厚誼を賜度何れ相当の仲人を立て御披露に日及候へ共不取敢以寸楮御通知申上候 敬具

谷崎潤一郎

千代

佐藤春夫

なほ小生は当分旅行致すべく不在中留守宅は春夫一家に託し候間この旨申し添へ候

谷崎潤一郎(45歳)

●昭和6(1931)年4月、古川丁未子(25歳)と結婚。丁未子は鳥取市生まれ。昭和3年大阪女子専門学校英文科を卒業。在学中から岡本の谷崎邸へ出入りしており、上京後、文芸春秋社の「婦人サロン」の記者をしていたが、間もなく社をやめて谷崎邸へ来て秘書として働いていた。5月、密教研究のため、妻を伴って高野山の泰雲院に三ヶ月ほど滞在して『盲目物語』を書いた。下山後、兵庫県武庫郡本山村岡本の家を処分して滞納税金を支払い、西宮市外大社村にある大阪の豪商根津清太郎の別荘の離れ座敷に住んだ。(46歳)

●昭和7(1932)年2月、兵庫県武庫郡魚崎町横屋西田554番地に転居。(47歳)

昭和8(1933)年5月、妻丁未子と別居。この年から『源氏物語』現代語訳の準備をはじめめる。(48歳)

●昭和9(1934)年3月、根津松子(旧姓森田松子、大阪の大株主森田安松の次女で、

根津清太郎に嫁していた)と同棲した。松子の妹二人も潤一郎のところへ移った。4月、松子、根津から森田姓に復帰。10月、妻丁未子と正式に離婚する。(49歳)

●昭和10(1935)年1月、森田(根津)松子と結婚した。松子には二人の子があり、長男は根津家に残し、長女を連れて谷崎に嫁した。9月から『源氏物語』現代語訳の執筆を始めた。(50歳)

●昭和12(1937)年6月、帝国芸術院(16年以後「日本芸術院」と改称)会員となった。(52歳)

●昭和13(1938)年9月、現代語訳『源氏物語』(3391枚)を、山田孝雄の全篇校閲を経て脱稿した。準備に2年、執筆に3年を費した。(53歳)

●昭和16(1941)年1月、「中央公論」主催の「新春鼎談」に、志賀直哉・武者小路実篤・梅原竜三郎と出席。7月、この年創設された日本芸術院会員となる。12月8日、太平洋戦争勃発を熱海で知った。(56歳)

●昭和17(1942)年5月、日本文学報国会が創立され、その小説部会名誉会員となる。11月、大阪中ノ島公会堂における同会主催の講演会で講演した。この年、『細雪』の稿を始める。(57歳)

●昭和18(1943)年1月・3月、『細雪』を「中央公論」に掲載したが、陸軍省報道部の忌諱にふれ、6月以降は続載禁止となり、3月号で中断した。しかし、中央公論社社長嶋中雄作の援助により稿は続けた。(58歳)

●昭和21(1946)年3月、単身上洛した。5月、家族を疎開先の勝山から迎え、京都市上京区寺町今出川上ル五丁目鶴山町三番地の一中塚方に仮住居する。11月、左京区南禅寺町下河原町52番地に転居。新居を潺湲亭(前の)と名づけた。(61歳)

●昭和22(1947)年6月、新村出・川田順・吉井勇と京都大宮御所で天皇に面会した。12月、『細雪』により21年度毎日出版文化賞を受ける。(62歳)

●昭和24(1949)年1月、『細雪』により、23年度朝日文化賞を受けた。3月、芸術院会員芸能関係者13名と天皇陛下の招待で会食した。4月、英国大使館員ブリックリー氏

により『細雪』が英訳される。4月末、左京区下鴨泉川町五番地（後の潺湲亭）に転居した。11月、第8回文化勲章を授与された。（64歳）

●昭和26（1951）年、この年、新訳『源氏物語』の執筆に専心する。11月、文化功労者となる。（66歳）

●昭和31（1956）年、暮に京都下鴨の邸を処分する。（71歳）

●昭和38（1963）年1月、『瘋癲老人日記』により、毎日芸術大賞を受けた。（78歳）

●昭和39（1964）年1月8日、尿閉のため東京医科歯科大学に入院。3月9日、退院する。5月、日本人としては最初の全米芸術院、アメリカ文学芸術アカデミーの名誉会員に選ばれ、6月10日、アメリカ大使館で名誉会員章をおくられた。7月、神奈川県湯河原町吉浜蓬ヶ平に新築移転、「湘碧山房」と名付ける。（79歳）

●昭和40（1965）年7月30日、午前7時30分、腎不全に心不全を併発したため神奈川県足柄下郡湯河原町吉浜蓬ヶ平1895の自宅で死去。絶筆は『七十九歳の春』と『にくまれ口』。京都市左京区鹿ヶ谷法然院に葬られた。戒名安楽寿院功誉文林徳潤居士。（80歳）
〔出典：荒正人編著『谷崎潤一郎研究』の中に集録されている「谷崎潤一郎年譜」（荒正人編）を参考に、必要部分を引用した。〕

終章

明治43（1910）年、25歳の時、有楽座に舞台稽古見物中の永井荷風を訪ね、『刺青』掲載号を渡した。荷風は委曲をつくし論評『谷崎潤一郎氏の作品』（「三田文学」明治44年11月）を発表するに及び、谷崎潤一郎の文壇における評価は決定的なものとなった。それから幾星霜、80歳で没する昭和40（1965）年までの半世紀に渡る谷崎文学の系列について述べようと思う。

谷崎の文学創作の系列はおおよそ3つに分類することができよう。¹²⁾

(1) 理想像として描いた美しい母を描写した作品（母性思慕の系列）

『母を恋ふる記』『吉野葛』『少将滋幹の母』『夢の浮橋』

(2) 耽美派、悪魔主義の作品（女性への拝跪性の系列）

『少年』『刺青』『麒麟』『盲目物語』『痴人の愛』『秘密』『悪魔』『続悪魔』

『瘋癲老人日記』『鍵』『春琴抄』『聞書抄』『卍』

(3) 優しく上品な世界を描いた作品（都雅な人情の系列）

『象』『台所太平記』『細雪』『潤一郎訳源氏物語』

以上のうち、昭和24（1949）年、『細雪』により、朝日文化賞を受け、同年11月、第8回文化勲章も授与されることになった。

この『細雪』の作品世界を象徴する文章を下記に列挙してみよう。そこには、昭和10年代の阪神間に生活する（芦屋・大阪を中心とする）モダンな上流家庭の女性を美しく描いている。昭和23（1948）年11月25日に再版発行された（中央公論社）『細雪』（上巻）を引用する。¹³⁾

或る朝幸子は、貞之助が事務所へ出かけて行つてから、いつものやうに書齋の整理をしに這入つたが、ふと、夫の机の上に、書翰箋の書き潰しが展べてあつて、餘白に鉛筆でこんな文句が走らしてあるのを見つけた。—

四月某日嵯峨にて

佳き人のよき衣つけて寄りつどふ

都の嵯峨の花ざかりかな

女學校時代に自分もひとしきり作歌に凝つたことのある幸子は、近頃又、夫の影響で、ノートブックの端などへ思ひつくまゝを書き留めたりして、ひとり楽しんでゐたのであつたが、それを讀むと俄に興が動いて、先日、平安神宮で詠みさしたまゝ、想が纏まらないでしまつたものを、暫く考へて次のやうに纏めてみた。—

平安神宮にて花の散るを見て

ゆく春の名残惜しさに散る花を

袂のうちに秘めておかまし

彼女はそれを夫の歌のあとの餘白へ鉛筆で書き添へて、もとの通り机の上にひろげておいたが、貞之助は夕方歸つて来て、それに気が付いたのかどうか何の話もせず、幸子も忘れてしまつてゐた。が、その明るる朝、彼女が書齋を片付けに行くと、机の上に昨日の通り紙きれが載つてゐて、彼女の歌の又あとへ、貞之助の手で、それをかう訂正してはと云ふつもりなのでもあらうか、次のやうな歌が記されてゐた。—

いとせめて花見ごろもに花びらを

秘めておかまし春のなごりに¹⁴⁾

『細雪』のこの華麗で繊細な描写から、誰れでも、美しい日本の四季、伝統的な雪月花の美意識の世界、そして、永遠なる女性美を理解することができるだろう。

この様に、谷崎潤一郎は芦屋を舞台に名作を世に残したが、その芦屋市に記念館を作り、谷崎文学の普及をはかり、後世にその業績を伝えることは大変意義のあることである。

谷崎が永遠の女性美を文学の世界に追い求めたように、記念館の建築デザインから谷崎文学の名作創造の源を視ることができるのである。

注と参考文献

- 1) 図録『谷崎潤一郎・「細雪」そして芦屋』辻本勇執筆「開館と松子夫人の思い出」、p. 8～p. 9、芦屋市谷崎潤一郎記念館編集・発行、1997. 12
- 2) 『芦屋市谷崎潤一郎記念館概要』芦屋市谷崎潤一郎記念館、p. 3、1998. 5
- 3) 『芦屋市谷崎潤一郎記念館概要』芦屋市谷崎潤一郎記念館、p. 4～p. 5、1998. 5
- 4) 『[建築設計資料] 28 記念展示館—文学館から企業博物館まで』建築思潮研究所 津端宏・山本直人、p. 92～p. 96、1999. 7. 20
- 5) 「富家建築事務所」とは建築家の富家宏泰が京都大学の教師を経て1952年に京都で設立した建築事務所組織です。(のちに株式会社化) 公共建築など数多く手掛たのち1990年代に会社組織を解消後、富家宏泰個人に戻り活動していましたが、2007年12月、富家宏泰は88歳で惜しくもこの世を去りました。作品：京都全日空ホテル、河原町カトリック教会、同志社大学記念会館、比叡山観光ホテル、京都府立文化芸術会館、京都新聞・京都放送本社屋、ワコール本社ビル、谷崎潤一郎邸(「父と私」TOMIIE DESIGN 富家大器、<http://tomiiedesign.jp/tomiken.html>)
- 6) 『谷崎潤一郎全集 第18巻』谷崎潤一郎著、「高血圧症の思い出 潺湲亭」、p. 135～p. 136、中央公論社、1982. 10. 25
- 7) 『谷崎潤一郎全集 第18巻』谷崎潤一郎著、「夢の浮橋」、p. 150、中央公論社、1982. 10. 25『夢の浮橋』谷崎潤一郎著、中央公論新社、初版 2007. 9. 25
- 8) 『谷崎潤一郎全集 第18巻』谷崎潤一郎著、「夢の浮橋」、p. 151、中央公論社、1982. 10. 25
- 9) 『谷崎潤一郎全集 第18巻』谷崎潤一郎著、「夢の浮橋」、p. 183、中央公論社、1982. 10. 25
- 10) 『谷崎潤一郎・「関西」の衝撃』たつみ都志(本名辰巳都志)、文学創造と空間、『夢の浮橋』と潺湲亭、「潺湲亭詳細図及び『夢の浮橋』との照合」、p. 264～p. 276、和泉書院、1992. 11. 25
- 11) 『谷崎潤一郎研究』荒正人編著、「谷崎潤一郎年譜」荒正人著、p. 711～p. 737、八木書店、1972. 11. 20 荒正人著の「谷崎潤一郎年譜」の中で、特に重要と考えられる年譜の項目を抜粋し、論文に引用した。ときに原文を省略したり、また、意味がよく通るようにするため塩田が自由に添削した部分もある。『谷崎潤一郎年譜考』千葉俊二著、p. 55～p. 73、NII-Electronic Library Service, Yamanashi Eiwa College 『谷崎潤一郎新潮日本文学アルバム 7』、「略年譜」p. 104～p. 108、新潮社、2006. 4. 20 『谷崎潤一郎論』中村光夫著、「谷崎潤一郎年譜」p. 207～p. 278、河出書房、1954. 9. 20
- 12) 『谷崎潤一郎の文学 近代の文学 8』橋本芳一郎著、p. 74～p. 178、「第三章谷崎文学の展開」、桜楓社、1976. 9. 10
- 13) 『細雪』上巻、谷崎潤一郎著、p. 232～p. 234、19章、中央公論社、1948. 11. 25
- 14) 図録『谷崎潤一郎・「細雪」そして芦屋』千葉俊二執筆『細雪』について、p. 46～p. 47、芦屋市谷崎潤一郎記念館編集・発行、1997. 12

A.

芦屋市谷崎潤一郎記念館

芦屋市谷崎潤一郎記念館についての一考察

[1]

正面入口



[2]

玄関通路



[3]

文官石人 (李朝)



[4]

展示室



[5]
展示室



[6]
展示室



[7]
展示室



[8]
展示室



[9]

庭園



[10]

庭園



[11]

庭からの眺め



B.

倚 松 庵

[12]

正面入口



[13]

応接間



[14]

陰翳礼讃



[15]

二階座敷



[16]
庭



C.

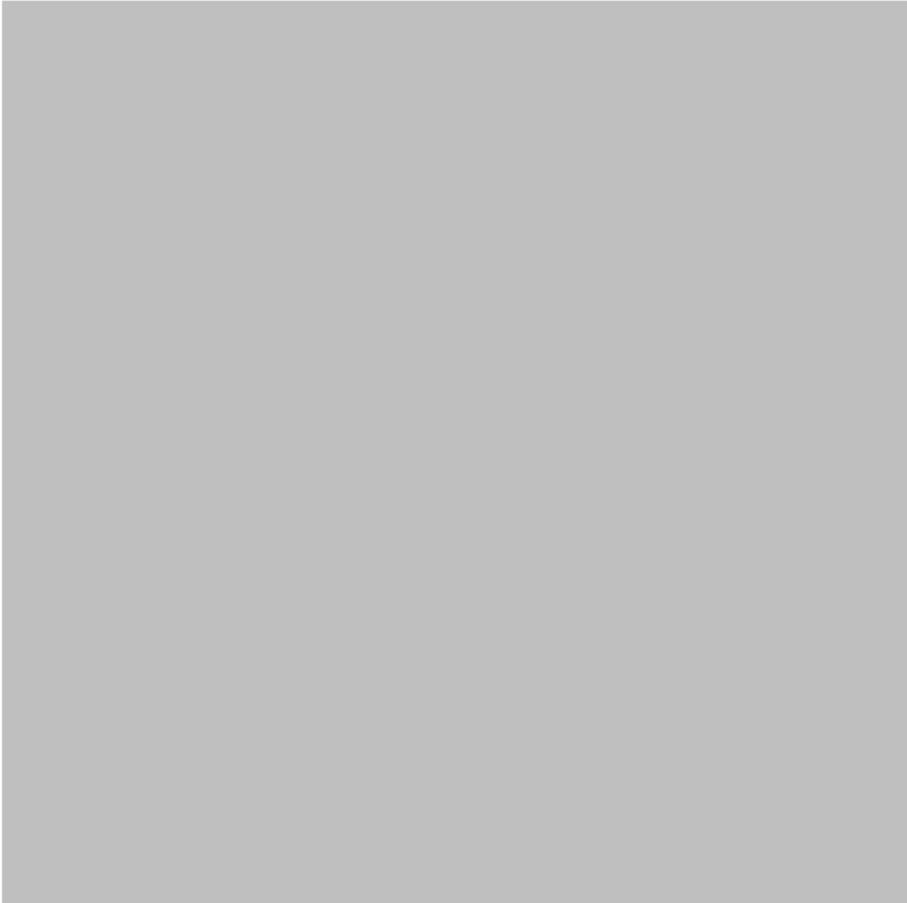
石村亭（潺湲亭）

写真撮影：若林 わかばやし 龍一 りゅういち
資料提供：日新電機株式会社

[17] 新春の母屋を飾る掛軸「春琴抄」

「をかに来てほからかに啼くや鶯 ありし日の谷間の雪にましへたる 氷る
なみたは 知る人 そしる」

樋口富麻呂画伯の画に、佐藤春夫作「春琴抄之歌」を谷崎自身が金泥で添え書きした掛軸。



[18] 池泉回遊式の庭

谷崎在住の頃の名称「潺湲亭」の名にふさわしく、池の向うから滝が落ち、添水を通して流れ落ちています。池の中ほどに架かる土橋が北の母屋と南の四阿・茶室をつなぎ、林泉と建物が一体化した調和を醸し出しています。



[19] 仕事場としての離れ・書齋

書家・銭瘦鉄による「潺湲亭」の扁額が懸る八畳間のこの書齋から、小説『少将滋幹の母』『鍵』などの名作が生まれました。谷崎による二度目の現代語訳となる『潤一郎新訳源氏物語』もここで完成しました。まさに夢の工房です。



[20] 小説にも登場する茶室

「石村亭」は谷崎の小説『夢の浮橋』の主人公・糺の住い「五位庵」として登場します。この茶室も「屋根が低く、部屋が狭く、まるで子供のために造られた玩具の建物のやうな気がするのが嬉しくて」と描かれています。



[21] 南の庭から眺める母屋・主室の縁側

『夢の浮橋』に「南側はわざと日の光りを避け、柵を池の面の方へさしかけてあつて、野木瓜の葉が一ぱいに繁つてゐ」と描かれた、欄干のある回り廊下の御殿風は谷崎の愛した眺めです。障子の日向と陰、光のコントラストが絶妙。



[22] 雪明りの美しい冬の石村亭

ここは右の表玄関、左の書院造りの主室に挟まれた、母屋の数寄屋造りの次の間です。白は谷崎の好きな色でしたが、京都の冬の底冷えは苦手でした。冬が創り出したモノトーンの一画です。寒ければ寒いほど、凜とした京都の冬は美しい。



写真の解説文は、日新電機株式会社広報グループ提供

D.

大手前大学さくら夙川キャンパス石碑

[23] 我といふ人の心はた、ひとり

われより外に知る人はなし

潤一郎



写真A、B、Dは、塩田昌弘撮影

